



慣れない手つきでも、山は楽しめる

木を切るのが初めてでも、教えられながらできるようになっていく。水士里隊の人々も、はじめの頃は経験者が少なかった。間伐によって根は深くなり保水性が高まり、森を災害から守る。木漏れ日ができて若い木が育ちやすくなる。



水士里隊が拠点とする、山小屋

(上) 水士里隊が作った、拠点となる山小屋。(右) 水士里隊の名前も誇らしげに。この場所を生かして、さまざまな活動が行われる。平日の活動が主だが、今後は町民対象のイベントなどを計画していく予定であるという。

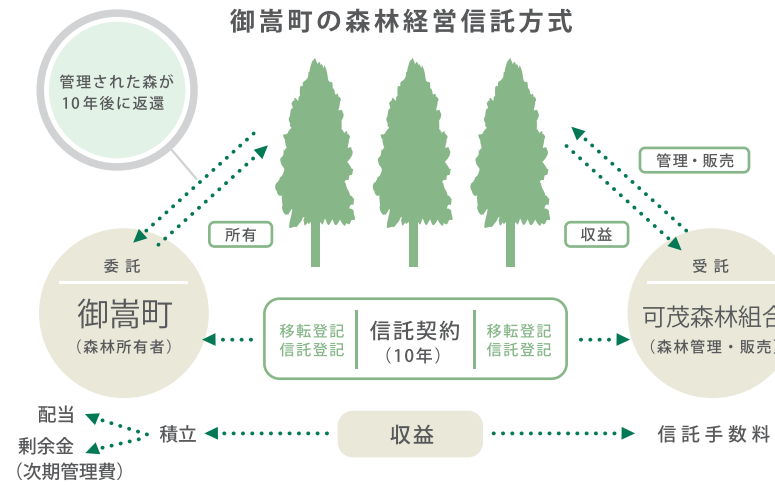


炭焼き窯が2ヶ所、炭や薪を保管する小屋が1棟。周辺に資材置き場や休憩所など充実した施設が整う。拠点の周囲はアカマツと広葉樹が混生した里山の森だ。

森を生かし、
森と生きる。



町有林管理における信託の仕組み



順調に推移している、売上

可茂森林組合が町有林約200haを信託。運営費の約7割を補助金で、残り約3割を木材の売上で賄う。事業を開始した2012年度は東日本大震災で木材需要が増え、2013年度は消費税増税の駆け込み需要で売上が伸びた。民間の森林経営のプロに運営をまかせたことで、市場への対応が臨機応変になった成果だという。



森がくれる、豊かな恵み

(上) 御嵩町の山で採れた天然のマツタケ。アカマツ林が多い町内の山を整備してマツタケ狩りが楽しめるエリアを守っていきたい。(下) 出荷を待つ、炭。キャンプ用の燃料や災害用の備蓄など、さまざまな需要に応じることができる。

MITAKE TOWN

ローカル線終点駅の町は、森と生きる未来への出発駅だった。
太陽光エネルギーは旅人をいやし、駅前には人々が戻りはじめていた。
森がつくる未来に賭けた人々。岐阜県御嵩町。

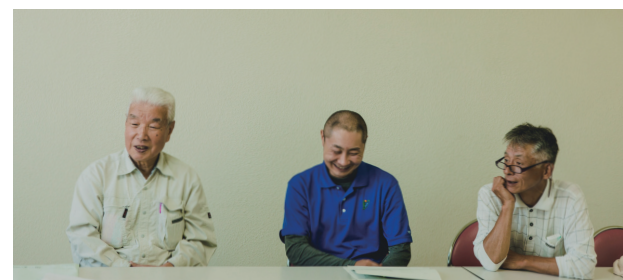


200haではじまった。「先行事例がない中で、里山ならではの試みを広げていきたいですね」と語るのは、可茂森林組合の河方智之さん。
御嵩町の町有林は広葉樹よりも杉や檜の人工林が多い。その木を切り、また間伐をすることで、木漏れ日が差す昔ながらの森に戻していく。地面に張られた根は土を受け止めて災害にも強い山に育っていく。
「今の段階では、御嵩の木でオリジナルの商品を創るというよりも、非営利で町有林を再生することに力を入れていきます。とはいえ収益的にも安定してきていて、今年、組合として新人を迎えることができました」と、語る。今後は森林経営信託方式を核として森林整備面積を私有林も含めて拡充。森林整備の担い手育成を目指す。今後の取組みが期待されている。
もうひとつ注目したいのが町民による森林ボランティア「水士里(みどり)隊」の活躍だ。人と自然が共生する本来の里山に戻そうと2004年に結成し活発な活動を行ってきた。なかでも大きな成果は、町有林の中腹にふたつの炭焼

き施設を備えた立派なベースメント基地だ。
「はじめはみんな山仕事に慣れなかった。少しずつ体験をして、山の手入れや薪割りをし、炭も焼けるようになった」と、水士里隊長の武藤哲生さんは振り返る。「特に松炭は火力が強いため、刀鍛冶の人から引き合いがあります」と、手応えを語る。
また、アカマツ林を手入れしてマツタケ山の再生も目指す。「整備して2、3年ですが、たくさんの収穫を目指しています」と語るのは、可茂森林組合の可児政司さん。
「間伐をしたアカマツ林は適度に日光と風が入りアカマツの細根のそばにマツタケが育ちやすい環境になるんです。そう語る足元にはアカマツの若木が育ち、整備することで将来の夢も広がっていく。
取材日は、御嵩町と同じ環境モデル都市の北海道下川町に研修で送り出す中学生の間伐体験の日だった。カンカン照りの中、除伐をする子どもたちの歓声が森に響いた。
世代を超えて森を守り、森を生かし、森と生きる。10年後のこのまちの姿が楽しみに思えてきた。

名 古屋から名鉄でおよそ1時間。のどかな広見線の終点に里山のまち、御嵩町はある。江戸時代には中山道の宿場が置かれ、にぎわった。このまちが岐阜県で唯一の「環境モデル都市」に選定されたのは2013年。最大の特色は、まちの面積の約6割におよぶ森林の活用だ。

CO₂吸収量を大幅に増やしながら持続可能な森林経営モデルを目指し、地元の可茂森林組合に運用を委託する「森林経営信託方式」を全国で二例目という英断で採用。森林組合のノウハウや信用力を生かしながら、町が費用を負担せずに町有林の管理と森林資源の有効活用を図る仕組みで、2011年から町有林約



(左から) 水士里隊 武藤哲生さん。可茂森林組合 河方智之さん、可児政司さん。「人が山に行かなくなり荒れてきた。災害の危険も大きくなった。だから山を守ろうという思いが強い。そのためにも、もっとみんなが山を体感し楽しめるようにしていきたい」。3人の思いはひとつだ。



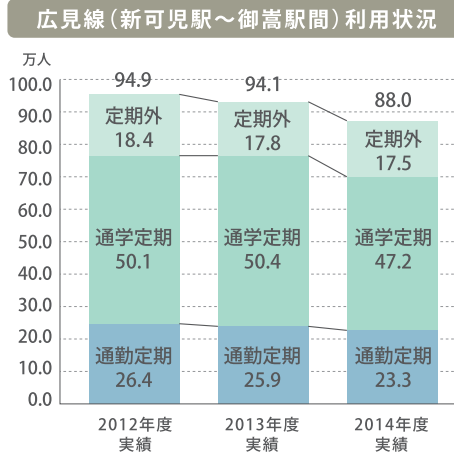
一人乗りEV、導入

超小型電気自動車 (EV) 『コムス (1人乗り)』。町職員が移動するための公用車として活用している。



電動アシスト付き自転車でラクラク

御嵩駅前には観光協会の「レンタサイクル」(無料)があり、町をめぐることができる。起伏の多い町内も電動アシストでラクラク。



名鉄広見線を守ろう会のみなさん

守ろう会のみなさん。御嵩駅前にオープンした元祖みたけとんちゃんの内所兼ショップ「よってりやあみたけ」のスタッフも兼ねる。



(左) 名鉄広見線活性化協議会 廣瀬吾郎さん

広見線に長く乗り続けてきて人一倍の愛がある。自ら手を上げて事務局に。以来、活発な活動を続ける。協議会のウェブサイト「乗って残そう、広見線」
<http://www.town.mitake.gifu.jp/kasseika/>

(右) 名鉄広見線を守ろう会 会長 伊藤也寸志さん

御嵩町の商工会青年部OB。持ち前のリーダーシップで、「エコピア」をはじめ、広見線存続のために奮闘。



60年以上、地域の移動手段として

地域の移動手段として1952年に御嵩口駅-御嵩駅間が開業し、現路線となる。赤字路線だが、地域にとっては大切な移動手段。駅舎は現在御嵩町観光案内所となっている。



地域の移動手段を守り、CO2削減につなげるために

名鉄広見線 (新可児駅～御嵩駅間) は、平成22年度から御嵩町と可児市が毎年約1億円 (御嵩町約7千万円 / 可児市約3千万円) の運行支援を開始。収支改善に向けて利用促進活動を展開しているが、利用者減少のストップには至っていない。かつては200万人を超えていた利用者も現在では約88万人にまで落ち込んでいる。「広見線は地域に必要な社会インフラ」という考え方に立ち、さまざまな取組みが必要とされている。



必要な電力はソーラーパネルで供給

エコピアガーデンに必要な電力は、さんさん広場に設置された50枚のソーラーパネルによる太陽光発電で賄っている。



新しいエコスタイル、エコピアガーデン

毎月第三金曜日。御嵩駅前のさんさん広場で開かれるエコピアガーデン。CO2削減と赤字線存続という固くなりがちなテーマを、楽しく参加するイベントに変えようという新しい試みは、多くの人の共感を呼び毎回300人を超えるまでに。近隣から電車で来る人も増えてきた。



にぎやかさは、縁日のよう

電車で訪れた人は出店で使える割引券がもらえる。焼き鳥、唐揚げ、焼きそば、生ビール、おでんなど、ビアガーデンの定番が並ぶ。「守ろう会」の伊藤さんたちが復活に力を入れたご当地ホルモングルメ「元祖みたけとんちゃん」が人気メニューだ。



終点の町が選んだのは、乗って残す毎日でした。



夏の午後6時。御嵩駅はときならぬラッシュを迎えた。「こんにちは」「先ほどはどうも」。明智。顔戸。御嵩口。沿線の駅から顔なじみが続々と電車であつてくる。毎月第三金曜日は、駅前の御獄宿さんさん広場の「エコピア (エコピアガーデン)」の日だ。

2007年。名鉄広見線の新可児駅-御嵩駅間の廃線が検討された。町内にふたつの県立高をもつ御嵩町にとっては、生命線。町全体で存続運動が起きた。

「なんとしても継続して欲しいという町の人の思いを伝えなくちゃと懸命でした」と語る名鉄広見線を守ろう会会長の伊藤也寸志さんは「乗って残そう」と、沿線ウォーキングイベントなど利用客を増やす試みをはじめ。町が目指すCO2排出削減の取組みともリンクした。この流れからエコピアも生まれた。毎回約300人が集まる。

高校生の時から60歳で定年するまで広見線で通ったという廣瀬吾郎さんは「娘と毎朝通った時期も長く、我が家の歴史のようなもの。私ほど広見線の良さを知る者はいない」と、現在はまちの「名鉄広見線活性化協議会」で、名鉄利用推進員として奔走している。今ふたりが推しているのは『10回1回プロジェクト』。クルマ利用10回に1回は電車に乗ろうというもの。その呼びかけに、沿線の店160店舗から応援を得て拡大中だ。

電車は、高校生や高齢者の重要な移動手段でもあり、地域活性化の重要なツールでもある。御嵩町でも名鉄に対して毎年7,000万円の運行支援を行っている。

CO2削減にはガソリンエンジン車の利用を公共交通や次世代モビリティへ転換することが急務。広見線活用につながる駅前無料駐車場の利用啓発、パーク&ライド拠点や太陽光充電施設を備えた観光用の電動レンタサイクルの追加整備など、モビリティシフトを積極的に促していく予定だ。公用車のEV転換もはじまっている。

日が落ちると「エコピア」も佳境だ。月に一度、まちの人がひとつになつて楽しむ。これまでなかったことだ。赤い電車は、エコを真ん中にして、地域の人の心もつなぎはじめています。



御嵩町長 渡邊公夫

1953年生まれ。町議会議員を務めた後、2007年より現職。現在3期目を務める。

自治体の境界を超えて、未来へ伝えたい。

「自分の町でCO₂排出をプラスマイナスゼロにしよう」。この思いが環境モデル都市への出発点でした。「森林再生」「公共交通と新交通システム」「再生可能エネルギー」こうしたことは、一つひとつが地道な取組みです。この地道さが評価されたと自負しています。御嵩町は、産廃施設問題という過去のネガティブな課題を環境モデル都市というポジティブな未来志向に変えてきた町です。御嵩町でやっていることは広域でもできるはず。自治体の境界を超えて、他の地域とも連携していきたいですね。今年から、同じ環境モデル都市の北海道下川町へ、町の中学生たちに体験研修に行ってもらいます。次の世代に期待したい。未来が楽しみです。

2015年8月、北海道下川町へ派遣した町内在学の中学2年生たちと。参加者らは1週間滞在し、森林の大切さを学んだ。



御嶽宿わいわい館運営スタッフ

(左) 丹羽琴美さん(右) 渡邊真奈美さん。わいわい館を運営する中でたくさんの人々と会うのが楽しい、と語る。



避難所への太陽光発電設備導入

御嵩町の3つの避難所（B&G海洋センター、中公民館、向陽中学校）に、太陽光発電、燃料電池、蓄電池を導入。体育館にはLED照明を併設し、災害時でも一定期間エネルギー自給が可能な「自立型避難所群」を構築する。再生可能エネルギー等導入推進基金を活用。



オープンな中庭が交流を生む（御嶽宿わいわい館）

太陽光パネルが見える屋根の下は、茶房棟。渡り廊下の下はイベントスペースで、町の人々のさまざまな催しに使われる。手前に交流棟があり、ギャラリー、会議などに活用されている。



町役場を包む、ゴーヤのグリーンカーテン

町役場を優しい緑が包む。室内にはグリーンの柔らかい光があふれ、外気温より2〜3℃低くなる。そのぶんエアコンの消費電力を抑えCO₂排出削減に貢献している。採れたゴーヤは、町役場から無料で持ち帰ることができる。



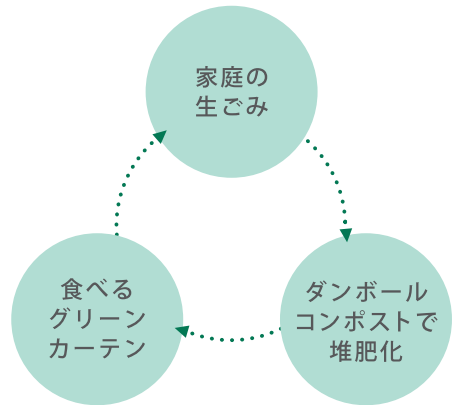
御嵩町生活学校委員長 斉藤貞子さん

御嵩町生活学校委員長の斉藤貞子さんは、創始期から参加し、御嵩町のエコライフをひたつてきた。この町のエコライフの母的存在だ。若い女性の参加に期待している。



子どもと一緒に環境を考える

町を流れる可児川で毎年“カワゲラウォッチング”を開催。身近な川の汚れを知り、住みよく美しい町を守るとともに、生活習慣を見直す意識を高めることを目的としている。水生生物観察と、川の水の濁度を確認する実験を通して、可児川の水質を学ぶ。



家庭で実感する循環型社会

家庭の生ごみが肥料となるまでおよそ半年。ダンボールコンポストとグリーンカーテンを組み合わせることで、循環型社会のモデルが暮らしの中で実感できる。

観光の拠点は太陽光を得て、もしもの災害にも。

旧 中山道49番目の御嶽宿を有する御嵩町。古く落ち着いた街並みの中、観光拠点と町の人のコミュニティスペースとして作られた古民家風の施設が『御嶽宿わいわい館』だ。省エネ住宅のモデルとして建てられ、使用する電気はほとんど屋根に設置した太陽光発電で賄われている。発電量は2.96kw。これに蓄電池15.6kwhが加わり、災害時に長期間停電になっても、太陽光さえあれば日射量に応じて発電した電力を非常用電源として使用できる。いつもは観光拠点も兼ねたカフェとして運営。「観光で来られるお客様の中には移住したいという方もいらっしゃいます」と、スタッフの渡邊真奈美さん。中山道



観光とエコが出会う、御嶽宿わいわい館

2010年にオープン。地元の物産の展示販売や喫茶コーナー、会議スペースを備えた。断熱性の高い壁面で薪ストーブを使うエコ住宅として、さらに全館を太陽光発電でまかなう。災害による停電時には、太陽光発電により電気を近隣世帯に融通する。環境モデル都市御嵩町のシンボルのようなコミュニティスペースだ。

を隔てて向かい側には、1200年以上の歴史を持つ大寺山願興寺。落ち着いた町並みが旅人を引きつける。古さが見直されている今、その良さを再生可能エネルギーのイノベーションで支え、新しい価値に変えていく。そんな試みが、ここ御嵩町ではじまっている。

一人ひとりが楽しめば、町全体が変わります。



生活学校はご存知だろうか？ 1979年に全国規模ではじまった生活者視点の生活改善運動だ。町の人々の主体的なCO₂削減を推進する御嵩町は、この生活学校との連携力を入れている。近年ではグリーンカーテンの普及に貢献。御嵩町生活学校委員長の斉藤貞子さんは暮らしを楽しむ女性らしい視点で取り組む。「よしずのかわりにグリーンカーテンにすれば、涼しいし、花も楽しめ、実もおいしいでしょ」。昨年末まではパッションフルーツやゴーヤを提案。町役場や公共施設から率先して実行し、町のいたるところが緑で覆われている。「生ごみを肥料にするダンボールコンポストも推奨しています。生ごみからできた堆肥でグリーンカーテンが作れば一石二鳥ですよね」。ワークショップも定期的に開催。家庭の廃棄物を抑え、CO₂削減と再生資源に有効活用し、循環型のまちづくりを目指す。一人ひとりが楽しめば、町全体が変わる。生活学校の取組みは暮らしを楽しみながら低炭素社会の実現を目指す知恵袋だ。